
妖討『美裂』

ゆめうつつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖討『美裂』

【Nコード】

N2299E

【作者名】

ゆめうつつ

【あらすじ】

異形の影に追われ逃げ場を失った少女、片辺美咲。かたなべみさき彼女は追い詰められた先で、それとは知らず、偶然にも『ある力』を手にする。そして、運命の輪が回り始めた。

第一話『異形の影』

シンと静まり返った夜の神丞学園。満月の灯に照らされた薄暗い廊下を、あたしの弾んだ息と足音が校舎の壁に大きく反響しながら、駆け抜けていく。

心臓が激しい鼓動を刻みつつ躍る。息が切れ、足が縛^{もつ}れても、あたしは走ることを止めなかった。だって……。

その時。遙か後ろで「ギシャアアッ！」と明らかに獣とは似て非なる、錆びて軋んだ鉄扉のような咆哮が、耳を小さく震わせ、朦朧とし始めた、あたしの意識を覚醒させる。

走ったことで滲んだ汗とは別に冷たい汗が噴き出して、頬を、そして背筋を伝い落ちる。

恐怖に駆られ、思わず後ろを振り向く。廊下の端、階段がある辺りから、ノツソリと現れる異形の影。

二メートル近くあるだろうか、巨大なヤモリに似た体の脇腹から“四対”の足を生やし、頭があるはずの場所からは担任の葉月先生……だったモノの腰から上が付いていた。

ヒッ……と無意識に喉が鳴る。

もう、あたしは後ろを振り向かなかった。ただ、懸命に前を見て走る。

こんなに走ったのは、いつ以来だろう。

人間死に物狂いなら何だって出来るんだな。

なんて、妙な感慨に耽っていたら、後ろから錆を含んだ生臭い匂いが漂って来た。

ま、まさか……ね。

次の瞬間、あたしは何か棒のようなもので、横殴りにされた。

不意のことで避け切れず、壁に激突した……と思ったら、そこを突き抜けて更に奥へ。

ガラクタの山みたいな所へ盛大に背中をぶつけながら埋もれた。

節々が痛む。暫く経ってから、漸く自分が化け物に薙払われ、通称『物置』と呼ばれている社会科準備室の扉を突き破って、様々な資料物品の真っ直中に突っ込んだことを理解した。

今や本物のガラクタと化した、ほとんどの資料の隙間から覗き見ると、怪物が唯一の入り口に立ちほだかっている。

ああ、死ぬんだな。

そう覚悟を決めた、あたしの右手に何かが触れた。

第二話 『つぎ、脱出へ』

「やれやれ、やっと出られる……」

何処からか、誰かの声が聞こえる。

「……誰？」

声にならない声で尋ね、あたしは右手を動かそうとした。

「つつ……！」

ピクリと微かに動いただけだったが、その瞬間、親指の腹に痛みが走る。

「あ！ バカ……」

畜生おつ、と罵声を残して、それきり誰かの声は消えた。右手に触れた何かも……。

思わず右手を見る。親指の腹に少し血が滲んでいた。

何だったんだろう、あの声……。

気になったが、今はそれどころじゃない。

「あ痛っ、たたたた……」

節々の痛みを堪えながら、埋もれたガラクタの山から何とか身を起こし、立ち上がる。

幸い、化け物の姿はなかった。

きつと、あたしを殺したと思ったんだろうな。

生憎と昔から体だけは頑丈に出来てんのよね。

なんせ、三階から落ちても打撲で済んでしまうくらいだもん……
って、考えただけで空しくなってきた。

男の子からしたら、どうなのよ。そんな女の子って。

ヘコみそうになったんで、慌てて思考を切り換える。
そう、早く此処から逃げなきゃ！

痛む体を叱咤しながら一階の昇降口を目指す。

化け物に遭いませんように、と願いつつ。

ソロリソロリと辺りを伺い、慎重に歩を進めていく。

膝が今頃になって、カクカクと笑い始めてきた。

化け物が校舎の西と東、どっちの階段へ向かったのかは判らない。取り敢えず、あたしは西側の階段を降りることにした。確信はないが、あたしにはさっき来た方向へ戻るなんて思えないから。

恐る恐る自分のいた四階から三階へ。月明りに照らされているとはいえ、足元に注意して歩く。一段……また一段と。

さっきまでとは違う、ジットリとした汗が制服を濡らす。不安と恐怖で、心臓がドクドクと跳ねている。

最後の一段を降り立ち、上下左右を見渡す。

ついでに廊下も覗いて、誰もおらず何もなかったことを確認した。

僅かに緊張の糸が切れ、ホオオッ、と大きな溜息が出る。

あたしの心に若干の余裕が出来た時、それは不意に訪れた。

第三話『鏡の中の……』

あ、何だか生臭い！ ……ちょっと待って。
この匂いは、まさか……。

あたしは嫌な予感に囚われる。

そっと後ろを振り返ると、階下から伸びてくる、有り得ない形の影が、異彩を放っていた。

一步……また一步と、ゆっくり後退り、次いであたしは、後ろも見ずに駆け出した。校舎の東階段へと。

廊下を半分ほど行った辺りで、足音に気づいたのだろう。化け物がペタペタした音を立てて近づいてくる。

あたしにしては珍しく、転ばずに東階段に辿り着いたのだけど……。

「キヤアッ！」

思わず悲鳴を上げる。何と今度は、階段の滑り止めでつんのめってしまった。

あたしは最上段から転げ落ち、大きな姿見のある踊り場の壁にぶつかって止まる。

「あいっ……たたたたた」

命がかかっているのに、どこまでドジっ娘なのよ！？ と叱咤したくなるが、普段のあたしからすれば、今まで転ばずにいた方が奇跡に近い。

逆に褒めてあげなくちゃいけないかも知れない。

……って、よく見れば此处、神盟学園の七不思議になっている場

所じゃない！

どうすんのよ……。

考えている間に化け物が、ゆっくりと階段の上に姿を現わした。そいつは追い詰められたあたしを見て、不気味に微笑んだ。耳まで裂けた先生の口から無数の牙が覗く。

「あ……」

死を意識した途端、忘れていた恐怖が軀を支配し、ガタガタと震え出した。

それは脚から腰にかけて伝染して、下半身の自由を奪う。

あたしは腰が抜けて、横向きに這うしか術がなかった。

「やれやれ。そんなんじゃ、先が思いやられちまうよ……」

不意に声が聞こえて、あたしはキョロキョロと辺りを見回す。

それは、化け物も同じだった。

「そんな調子で“妖”が倒せるのかよ！ あ、た、し」

再び声が出て、あたしの横にしゃがんでいた人影が立ち上がる。

え？ 誰？ あたしの他に人はいないはずなのに。

それに隣りは踊り場の鏡……。

そこまで考えて、あたしは恐る恐る鏡の方を向く。

「——っ！」

驚きで声を飲み込んでしまう。

信じられるだろうか。鏡に映るあたしが立っている。紅い制服を着て。

良く見れば、髪も朱い^{あか}。

しかも、アタシ——あたしは、鏡の中のあたしをこう区別した——は、あたしを見ていた。

そして、こう言った。

「死にたくなけりゃ、サッサと手を出しな！ アンタがソレと戦う

にや、まだ早いんだよ！」

呆気にとられていたのは化け物も同じだったが、あたしよりは早く事態を飲み込んだらしい。

鋭い爪を振り上げて、襲いかかってきた。

第四話『妖刀、朱の魅裂』

「早くっ!!」

鏡の中のアタシに、語気強く言われて反射的に右手を出す。

次の瞬間、あたしは更に信じられない光景を眼にした。

鏡の中へ、あたしの右手が沈む。

その右手を引っ張られ、気がつけば、あたしは何処か別の場所にいた。

そして、目の前にはアタシが……。

「これから先は、アタシがやる。アンタ、名前は？」

アタシの迫力に気圧されて、あたしは正直に答える。

「美咲……片辺美咲。かたなべみさきこの学園——神盟学園の二年生、十六歳……」

そしたら、歳まで聞いちやいないよ。って、鼻で笑われた。

「まあ良いさ。アタシも『魅裂』みさきだ。

じゃあ、美咲。死にたくなけりや、こう言いな!

“現身変化、朱の魅裂”げんしんへんげ あか ってな

少し怖い気もしたが、死ぬよりはマシだろう。少なくとも今は、あたしを助けてくれている……と信じたい。

だからこそ、あたしは訳も判らないままだけど、ハッキリ宣言した。

『現身変化、朱の魅裂……』

その瞬間。近づいた魅裂が、あたしに重なり溶け込んでいった。

少しの目眩。自分の意志とは無関係に体が動いて、後ろを振り返る。

そこには、一枚の絵画のように映し出された、化け物の姿があった。

「此処は鏡裏の世界だよ。

今、時間は刹那の中を、ゆっくりと動いてる。

もう少し遅けりや死んでたね」

魅裂が告げる間も、あたしは“絵”の境目を通り過ぎ、現世へ舞い戻る。

鏡の中から出てきたのだ、と気づいた時は、首を少しだけ動かして化け物の爪を避けていた。

へっ？ と、思わず声が……出なかった。

何でえっ？ どうしてえっ？ 頭の中で疑問が渦巻く。

「しばらくアンタの身体を使ぜ。我慢しろ」

頭の中の疑問に、あたしの口が答える。

その間にも、あたしの身体は化け物——魅裂が“妖”と言っていた——の攻撃を紙一重で避け続けている。

あ、あたしってこんなに運動神経良かったかな……。

考えている間にも、あたしは鏡の中に手を入れて……って、ええっ！？

あたしは鏡から一振りの刀を掴み出していた。

雨のような斬撃を縫い、鞘から滑り出るようにして刃が煌めき、鋭い弧を描いて鞘に戻る。

キン、と甲高い音を立てて、“妖”の背から生えた爪の先端が断ち切られた。

スゴイ……！

“妖”は、あたしを警戒してか、ジリジリと間合いを取り始める。その視界に鏡が映る。

しかし。そこにいるあたしの姿は、あたしの記憶と僅かに違っていた。

癖っ毛でウェーブのかかった腰まである長い茶髪は、朱色がかった黒いストレートヘアになり。

瞳の色も深紅に変わり、ちょっと垂れ気味の目尻は鋭く吊り上がり、口許に浮かぶ不敵な笑いと相俟って良く似合う。

触れれば斬れそうな美人がそこにいた。

もしかして……魅裂？

「やっと気づいたか」

あたしの疑問に魅裂は答え、踊り場から一転して階下へと宙を可憐に舞う。

魅裂が動いたことで警戒の均衡が崩れ、“妖”が再び襲いかかって来た。

第五話『魅裂、舞う』

あたしは魅裂に感心……いや、感服する。

彼女の動きは決して激しくない。

むしろ静かで、ある時は避け、ある時は受け、そして緩やかに流す。

まるで能か神楽を舞っているような感じだ。

もし、あたしが端から見ていたら命のやり取りではなく、決められた殺陣^{たて}か何かのように錯覚したに違いない。

綺麗……。

声に出る訳ではないのに、思わず呟いていた。

月の光に蒼く煌めく白刃が幻想的で、束の間、恐怖を忘れた。

だが、それも長くは続かない。

業を煮やした“妖”が大技を繰り出したから。

背中を丸めたかと思うと、ミシミシと音を立てて、無数の刃に似た棘のようなモノを生やす。

次の刹那には、それ等が校舎の通路一杯に乱反射しながら迫って来る。

僅かな溜めの間に少し離れただけの魅裂では、どう足掻いても避けようがない。

しかも、恐ろしいほどの速さで飛んで来る。あたしは細切れになった自分を想像して、意識を手放しそうになる。

「しっかりしろ、美咲！」

魅裂に喝を入れられて、意識を引き戻した。

そのあたしの目に映ったのは、信じ難い光景だった。
腕の感覚は、超高速で動いていることを脳に伝えている。

しかし、あたしの目は、ゆっくりと迫る刃が次々とあらぬ方向へ弾かれて行くところを捉えていた。

永いような一瞬。

アタシに当たるはずの攻撃は、全て弾かれていた。

あたしはもう、驚きの連続で、ただ口をポカンと——いや、あくまであたしの感覚としてだけなんだけど——開けてしまっていた。

あ、あたしにあんな事が出来るなんて。

しかも、何？ あの腕の感覚は。

普通あんな速さで動いたら、千切れちゃうでしょう？ 何で平気なわけ？

疑問ばかりが頭に浮かぶ。

それ以前に……何で、あれだけ派手な立回りしておいて、廊下に傷一つないのお！？

「へっ！ さっきから随分と賑やかだな。

廊下に傷一つないのは、奴等の結界が張られているからさ。

腕のことは、美咲が元々持っていた潜在能力。

まあ、それは後で話すとして……。なあ、美咲。“疾る斬撃”つてやつ、見てみたくなえか？」

え？ 斬撃……って、疾るの？

想像がつかなかった。

無理矢理に想像したら、足が生えてシュタタタタ、と全力疾走する刀を想像してしまった。

「プッ。クッ……クッ、クククッ……アーツ、ハッハッハッハッ」

魅裂が突然、笑い出した。

「……ハッ。ヒー、可笑しい……」

アタシが急にお腹を抱えて笑い出したことで、“妖”の動きが止まる。

第六話『魅裂の技“地走り”』

そして、あたしは気づく。もしかして……。

あたしの考えていることって、魅裂に筒抜け？

「そう。今頃、気づいたの？ アンタ」

魅裂の言葉に、あたしは顔を真っ赤にして——いや、気持ち的に
だけど——内心で反論する。

しっ、仕方ないでしょ。想像できなかったんだから。

「そっ、それにしたってアレは……」

魅裂は、さっきのイメージを反芻したらしく、ケラケラと、また
笑い声をあげる。

そんなに笑わなくなっちゃっていいでしょう？

「あー、可笑しかった」

拗ねるあたしへ言い聞かせるように、ひとしきり笑った後、魅裂
が言う。

「悪い、悪い。んじゃ、“疾る斬撃”……良く見ときな」
さっきまでの口調が打って変わる。

雰囲気が変わったのが判るのか、“妖”が再び動き出した。

ヒュッ！ と空気を裂くような音がした。

腕の感覚が、刀を切り上げ、そのままの勢いで切り下ろされたこ
とを伝えてくる。

「演舞……“地走り”の型……」

一瞬の静寂。

継いで鳴り響く生木を割るような破裂音。

それは、足下から聞こえて来た。

音は次第に大きくなる。

と、突如リノリウムの床が内側から吹き上がり、通路に裂け目を作ると、“妖”に向かって一直線に伸びていく。

眼で見えないはずの斬撃は、亀裂から舞い上がる粉塵と共に、眼で見える形で“妖”を鮮やかに切り裂いた。

『ギュグアアアッ』

断末魔の叫びを上げながら、“妖”はサラサラと砂のように崩れ去っていった。

「どうかしたか？ 美咲」

あたしの雰囲気を感じ取ったのか、魅裂が問い掛けてくる。

うん。あのね……魅裂。貴女、あの化け物のこと“妖”って言うてたよね。説明して！ あれは一体、なんなの？

ああ、と素っ気ない素振りで彼女は応じる。

「異界から来た化け物。アンタにも判りやすく言や、魑魅魍魎の類って奴。」

それが人間に取り憑いて実体を持ったのが、“妖”。

取り憑かれた奴は、まず元には戻れない」

魅裂の説明を聞きながら、断末魔の悲鳴に隠れて聞こえた、耳に残っている先生の囁きが蘇る。

“私は死にたくないのに、どうして……”

ねえ、魅裂……。先生は——化け物になった、あの女性は救えなかったの？

あたしの問いに、魅裂が搾り出すような苦い声で答える。

「アタシにゃ、無理だ。まだ力に目覚めてないアンタでないとな…

…」

え？ あたし！？ ちよっ……それって、どういう……。

「さて、と。んじゃ、自由になったことだし、娑婆へ遊びにいくとするか！」

あたしの言うことを無視して、魅裂が言い出した。

へ？ 一瞬、意味が解らずに、あたしは戸惑う。

自由？ ……って、ああああっ！！

あたしは、未だに身体が利かないことに気づく。

ちよっとおおっ！ あたしの身体返しなさいよ、魅裂っ！！

あたしは、焦りを隠せずにうろたえる。

でも、そうしたところで、自由が戻るはずもなく……。

あたしは、泣く泣く魅裂の夜遊びに付き合う羽目になる。

トホホホ……。

第七話『ひとまず決着。その後で』

彼女の夜遊びは、ウインドウショッピングに始まり、ゲーセン・カラオケなど、現代のあらゆる情勢や娯楽を知ることみたい。

魅裂は恐ろしいまでの速さで、現代の知識その他を、あたしには真似の出来ない速さで吸収していった。スゴイ……。

でも、あたしの財布、中身は大丈夫かなあ……。

それから夜も更けて来て、繁華街は大人の時間の様相を呈しつつあった。

そろそろ本格的にヤバくなってきた。

家は結構、門限に厳しい。

……って、身体の自由は利かないし、魅裂は相変わらずナンパされてるし……。

ふと違和感。ナンパ？ いつ？

考えている間にナンパ男の唇が目の前に……。

「――嫌ああああっ!!」

あたしは、ソイツを突き飛ばして絶叫すると、即座に駆け出した。何処をどう通って、家に帰ったのか良く覚えていない。

気がつけば自分の部屋で目が覚めた。

あたしは、寝ぼけ眼を擦りながらベッドを出る。

ドレッサーへ座り、髪を梳かすこと暫く。

いつもの、ひどい寝癖と格闘していた手が、はた、と止まる。

あれ……？

良く確かめようと、更に寝ぼけ眼を擦る。

あたしの髪って、こんなストレートでサラサラしてたっけ？

思わず、髪に触れる。

やっぱり、いつもの髪だ。ねこっ毛で寝癖のひどい……。

自分の眼でも確かめる。

やっぱり、いつもの髪。少しブリーチして栗色と言うか茶色と言うか、どっちつかずの色をしている。

交互に見比べて、違和感の正体を探るあたし。

紅い制服が美しく鏡に映……紅？

あたしは、目線を自分の服に向ける。

……昨日の、白い制服のままだった。

再び目線を上げると、鏡の中のあたしがニッコリと笑う。

あたしも釣られて、にへら、っと笑う。

そのまま、しばし硬直。

よっ！ と鏡の中のあたしが挨拶したのが、きっかけ。

「うわあっ！ あ……あっ。あたっ……：しが、喋っ。喋っ……」

あたしはパニックを起こし、上手く喋れなくなる。腰も当の昔に抜けていた。

鏡に映っていたのは魅裂。

まだ信じられなかった。

だって一晩、寝て起きたら、夢としか思えなかったんだもん。そんなあたしを余所に魅裂は、ニヤリと口の端を歪めて言った。

「これから宜しくな、美咲」

彼女らしい不敵な笑みだった。

ハア……どうしよ……。

取り敢えず抜けた腰が戻るまで座ってようか。

「美咲！　いつまで仕度してるの！　遅刻するわよ！」

そんな暇も与えて貰えないらしい。

階下から聞こえる母の催促に、ゲンナリしながら仕度を終えて、学校へ向かう。

何か、朝からドツと疲れた気がする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2299e/>

妖討『美裂』

2010年12月11日19時38分発行